

平成 29 年 3 月 1 日

女子体操競技情報 24 号

(公財) 日 本 体 操 協 会
東京オリンピック強化委員会
女子体操競技強化本部
審判委員会女子体操競技審判本部

日本体操協会では、東京オリンピック強化委員会女子体操競技強化本部による 2017 年強化指針と審判委員会女子体操競技審判本部による 2017 年採点指針をここに通達し、この通達をもって適用いたします。

2017年 強化指針

東京オリンピック強化委員会
女子体操競技強化本部長
塚原 千恵子

全体として

第31回リオデジャネイロオリンピック競技大会においては、団体予選7位で通過し、団体決勝では1968年メキシコ大会以来、48年ぶりに4位入賞を果たした。ロンドンオリンピックからの経験者は寺本選手一人だけであったが、チームのムードは大変良く、初出場の若手選手らがのびのびとした安定感のある演技を行った結果である。

団体1位のアメリカは、予選において段違い平行棒が世界ランキング2位でそれ以外は全て1位であり、2位のロシア・中国とは8点以上の差があり圧勝した。4位の日本は3位の中国と1.632の差であった。個人総合では寺本選手が8位に入賞し、村上選手は14位。種目別決勝においては村上選手のゆかが7位入賞で終わった。

日本の各種目の世界ランキングは、予選を見ると跳馬6位、段違い平行棒6位、平均台10位、ゆか4位、決勝においては跳馬4位、段違い平行棒6位、平均台6位、ゆか3位であった。この結果から、過去、日本は段違い平行棒・平均台が上位で、跳馬・ゆかが10位前後で得意種目ではなかったが、今大会は跳馬・ゆかのDスコアが高く、決勝においてゆかの3位は強化の成果が表れていた。しかし、段違い平行棒は世界の流れに追いついておらず、更に演技構成の工夫をしてDスコアを上げることが課題となった。

東京2020五輪の第一目標は団体3位以内である。さらに個人総合・種目別でもメダル獲得を目標にするために、FIG採点規則の改訂に伴った具体的な中期計画が必要である。そのためには、まずは15点台の得点を獲得できる演技構成を考えていかなければならない。特に跳馬においては、ユルチェンコ～後方伸身宙返り2回半ひねりが6.3→5.8、前転とび～前方伸身宙返り1回半ひねりが6.2→5.8になり、全体的にDスコアが下がった。東京五輪ではユルチェンコ～後方伸身宙返り3回ひねりや前転とび～前方かかえ込み2回宙返りなどの6.0以上の技に挑戦しないとメダルには届かない。段違い平行棒は移動技の工夫（移動技の大きさと流れを重視）と6.0以上の構成を目標としたい。平均台では、跳躍系が昇格している技が多いのでDスコア6.0以上の構成を考えたい。また世界の傾向として簡単なA難度の上がり技ではなくD以上の上がり技を構成に組み込んでDスコアを上げる努力が必要である。ゆかでは体操系やコレオグラフを重視した芸術性や、アクロバット前後の振り付けの多様性が要求されてくる。リオ五輪で日本選手は種目別に残ったが、Dスコアが6.0以上あってもEスコアでトップ選手との差が1点近くもあった。この差がどの箇所で減点されたのか具体的に検証する必要がある。

また、昨年の国内選考会の採点をリオ五輪の採点と比較してみると、跳馬・ゆかの採点が高く、段違い平行棒・平均台が低く採点されていた。今後は代表選手選考会においては強化と審判がより連携を図り、国際基準で採点されるよう図ってゆく。

更に、世界レベルの男子体操指導者や海外から優秀な技術指導者を要請し、従来のナショナル選手強化とターゲットエイジ選抜チームによる選手強化の両輪で選手強化を図っていきたい。

<跳馬>

- ・Dスコア 5.8 点以上の跳躍
- ・着手時の肘の曲がりや足の乱れなど姿勢欠点のない演技
- ・高さや距離を伴うダイナミックな演技
- ・高い姿勢での安定した着地

<段違い平行棒>

- ・基本技術の姿勢不良（身体の反り、肘のゆるみ、脚の乱れ）の修正
- ・倒立局面の角度（10 度以内）の徹底
- ・空中局面を伴う技の高さ、回転不足、空中姿勢
- ・D、E 難度から組合せ点をとる（両棒間の移動技の工夫）
- ・高い姿勢での安定した着地
- ・終末技はD 難度以上

<平均台>

- ・開始技はC 難度以上
- ・ふらつきのない安定した演技
- ・つま先、膝が伸びた脚のラインと体線の美しい姿勢
- ・D、E 難度以上のターンや跳躍技
- ・跳躍技の高さ、開脚度（180 度以上）の正確な実施
- ・アクロバットの高さや姿勢、安定した実施
- ・高い姿勢での安定した着地
- ・終末技はD 難度以上

<ゆか>

- ・アクロバット系の技はD、E 難度を含む構成（F 難度以上への挑戦）
- ・アクロバットの長さ・スピード・姿勢欠点のない演技
- ・アクロバットは安定性のある着地
- ・アクロバット前後の動きの多様性
- ・跳躍技は規定された姿勢や正確な実施
- ・顔の表情も含めた芸術的な演技と動きにマッチした音楽の選択
- ・C 難度以上のターンや跳躍技
- ・終末技はD 難度以上

2017年 採点指針

審判委員会女子体操競技審判本部

全体として

リオデジャネイロオリンピックを終え、2020年東京オリンピックに向けて新たなスタートが切られました。リオデジャネイロオリンピックにおいて日本女子チームはメキシコオリンピック以来48年ぶりの団体総合第4位、個人総合で寺本明日香選手が第8位入賞と大変素晴らしい成績を収められましたが、2020年東京オリンピックで更に高い目標を達成させるためには、これまで以上に高いDスコアを獲得できる演技構成への挑戦が必須になります。特に段違い平行棒は、ここ数年上位国との差が明確に現れた種目であり、昨年に引き続き多様な空中局面を伴う技の習得と、組み合わせ点を複数獲得できる構成に取り組むことを強く望みます。平均台、ゆかにおいてもアクロバット系、ダンス系の技ともに高い難度の技の習得と組み合わせ点を獲得できる組み合わせを演技の中に複数組み込む必要があります。選手、指導者の皆さんには、東京オリンピックに向けて高いDスコアを獲得できる演技の構築を目指し、積極的な取り組みを切望いたします。

採点においては、それぞれの技の特性をよく理解した上で、その技の理想像を念頭に置き、適切な減点ができるようにします。また、技の実施はもちろん、立ち姿勢や歩く姿勢においても手先足先がコントロールされた欠点のない姿勢での演技であるかを見極め、個々の技に対する減点だけでなく演技全体に対する減点項目を有効に使い、常に美しい姿勢での演技とそうでない演技との差を明確につけていきます。

これまですべての種目において美しい体線での演技を採点の最重要項目としてきましたが、これを基盤にした上で、高い難度の技や組み合わせ点を獲得できる演技構成を高く評価し、日本全体でDスコアの向上を目指した取り組みを進めていく必要があります。東京オリンピックへの第一歩として、高いDスコアの演技と姿勢欠点のない美しい姿勢での演技を採点における重要な観点といたします。

各種目について

跳馬

【指針】

- －高さや距離を伴うダイナミックな跳躍。
- －着地の体勢が高く、安定した着地。

【採点上の留意点】

- －ダイナミックさに欠ける跳躍については、跳躍の大きさから感じられる迫力だけでなく、技の難易度から受ける迫力や雄大性なども加味し、第10章 跳馬「種目特有な実施減点」の「ダイナミックさに欠ける ー0.10/0.30」を有効に使うことで差をつける。

段違い平行棒

【指針】

- －肘の曲がり、膝やつま先の緩みのない美しく伸びた体線での実施。
- －多様な空中局面を伴う技を組み入れ、組み合わせ点を獲得できる演技構成。
- －空中局面を伴う技の大きさと、ひねりを伴う技の正確な実施。
- －終末技の高い体勢での安定した着地。

【採点上の留意点】

- －け上がり、振り上げなどの基本技の姿勢においても注視し、各技の欠点については、その都度個々に減点する。
- －上記指針の内容に沿わない演技に対しては、第8章の一般欠点と減点表の減点項目や第11章 段違い平行棒「種目特有な実施減点」を有効に使う。

平均台

【指針】

- －立ち姿勢や歩く姿勢においても手先足先までコントロールされた、常に美しい姿勢での演技。
- －多様な技を組み入れ、組み合わせ点を獲得できるなど高得点を得るための前向きな構成。
- －アクロバット系、ダンス系の技の正確な実施。
- －リズムとテンポの変化があり、技の前の停止や無駄な調整のないスピード感ある演技。

【採点上の留意点】

- －上記指針の内容に沿わない演技に対しては、第8章の一般欠点と減点表の減点項目や第12章 平均台「芸術性と構成の減点」「種目特有な実施減点」を有効に使う。

ゆか

【指針】

- －立ち姿勢や歩く姿勢においても手先足先までコントロールされた、常に美しい姿勢での演技。
- －多様な技を組み入れ、組み合わせ点を獲得できるなど高得点を得るための前向きな構成。
- －アクロバット系、ダンス系の技の正確な実施。
- －スピードや迫力を感じさせる雄大な実施と演技面を大きく使用した躍動感のある演技。
- －選手の個性にあった振り付けと音楽の調和、顔の表情も含め全身を使った表情豊かで魅力的な演技。

【採点上の留意点】

- －上記指針の内容に沿わない演技に対しては、第8章の一般欠点と減点表の減点項目や第13章 ゆか「芸術性と構成減点」「音楽性」「種目特有な実施減点」を有効に使う。

【跳躍や演技を試みなかった場合の国内対応】

国内競技会においては、従来認められていたように、緑ライトの点灯またはD1 審判員からの演技開始の合図の後、選手がD 審判員に挨拶をし、跳躍板や器具に触れてから再び挨拶することで**0.00**点として扱うこととする。(すべての種目)